

幼稚園における指導のいろいろ

服 部 縫 子



私は職務上、いろいろな先生方のいろいろな保育を見せてもらつてるので、それらの中で特にすぐれた指導の実際を領域ごとに、その計画や内容、指導の過程などくわしく紹介することが題目にふさわしいのかもしれないが、それはともすれば末梢的な指導の方法や技術のように受けとられそうで気が進まない。

原稿を依頼してこられた側の意図をたしかめればよいとは思ひながら、もしかりに領域の指導の内容や方法についてくわしく書いてくれといわれでもしたら、あいにく私にはそのような資料の持ちあわせもないし、それを書いてみようという気持にもなれないで、あらためてたずねもせず、ひとりで「指導のいろいろ」という題目をひねくりまわしてみた。

今、幼稚園の現場では、子どもの実態や園の実状をふまえて、

年次別の指導課程や指導計画の研究が進んでいるが、また一方では「幼稚園においては指導をどのように考えればよいか」「幼稚園における指導とは何か」といったところが問題にされている。

教育課程や指導計画の作成によって、子どもの経験や活動の内容が豊富になり、日々の指導計画が充実されたとしても、これはあくまで教師の側の計画であって、これを子どもにいかに経験させるかというところに、幼稚園教育のたいせつさがあり、この子どもの経験の場にこそ指導があるのだと思う。

今、私に与えられた指導のいろいろという題目も、実際の保育のいろいろな場で、ひとりひとりの子どもが、主体的な経験を通して成長していくその過程において、教師がその子の成長にどんな役割を果たしているか、その役割のいろいろを考え、またどん

な援助の仕方が有効なのであるかを考えてみるところに「指導のいろいろ」という意味があるという立場からこの稿を進めてみたい。

一、教師と子どものかかわりあり

五月のよく晴れた日、N先生のクラスの子どもたちが園庭で自由に遊んでいた。

O君は砂場のまん中でひとりで大きな穴を掘っている。周囲には同じように穴を掘っている子や、山を作っている子がいたが、彼はそれにはかかわりなく自分の遊びに熱中していた。掘った穴

がかなり大きくなると、体をその中に入れて、まわりの土を無心に掘り続けている。

彼がいっしょにけんめい力を入れて掘っている姿を見ていると、彼の穴掘りには何かの意味があるよう思える。だが穴が相

当大きくなつた頃、力が尽きたのか、この遊びにあきたのか、ふらりと立ち上がり砂場の隅へ行って、また新しい穴を掘ろうとしたその時、N先生が近づいて来て、「O君、何してるの。落し穴できた」とたずねられた。そのとたん、O君の顔は急にいきいきと輝き、ここにこして、さつきの穴へ勢いよくぼんと飛び込んだ。N先生はそれを見ると、さも嬉しそうに、「できた、できた」といわれた。するとO君はさつきよりももっといそいそと、

周囲の砂を掘りだしたのだ。

「落し穴できた」という先生の声を聞いたO君が、全身で喜びを表現して勢いよく穴へ飛び込んだ気持を、先生はたった二言の「できた、できた」という短いことばで受け止めた。私はそれを見て、何とすばらしいなと思った。

これはその時のO君の喜びをそのまま感じられたN先生だからこそいえることばだと思い、O君の喜びを共によろこぶ先生の気持ちが、短いこのことばを通してO君に伝わったれど、彼はまたいきいきと遊びに取り組んでいったのだろう。

N先生は今度はすべり台の方へ近づいていった。そこにはおおぜいの子が群がつて遊んでいた。特に元気な男の子は二、三人つながつてすべつたり、下から登つて来て、途中からすべりおりたりしていた。

そんな中に、ジャングルジムの枠をよちよち登つて、皆の後からやつとすべり始めたA子がいた。A子はまだ幼稚園の生活に慣れないのか元気がなかつた。N先生はA子の姿を見つけると「A子ちゃん、すべつてみせて」といった。A子が友だちを避けながら、やつとすべり台の上にたどりついた時、先生は「A子ちゃんがすべらはるえ。A子ちゃんがすべらはるえ」といわれた。その声を聞くと今まですべり台の上にかたまっていた男の子も、下か

ら登つてこようとしていた子どもたちも、みんな自然にすべり降りてA子のすべる道を開けた。

私はそれを見て、胸が熱くなるような感激を覚えた。A子が常からみんなのように活発に遊べない子であることは想像できた。

そしてN先生はその子のことをいつも気にしていられることも先生の態度から感じとられた。

ところが私の心を打ったのは、A子に対するN先生の深い愛情

が、他の子どもたちにも通じているということなのだ。「A子ち

ゃんがすべらはるえ」といった時のN先生の眼は、じつと彼女に

そそがれ、やさしい先生の声はA子を励ますように受けとれこそ

すれ、決して「みんなのきなさい」と注意しているように響か

なかつたのに、子どもたちは先生の声を聞くと素直にすべり降り

てA子のためにすべる道を開けたのである。

私は日頃N先生が、どんなにひとりひとりの子どもを大切にし

ているかを知ることができたと思った。また子どもたちも、友だ

ちひとりひとりを認め合っているふんい気がこのクラスに流れてい

いるのを感じて胸が熱くなつた。A子はいきいきした顔で元気に

すべり降りると、向こうへ去つて行く先生の姿をじっと目で追

い、またすべり台の傍へ戻つて来てくれる先生を待つてるのであつた。

こうした一時間の遊びの中に、私は先生のすばらしい「指導」をみたと思った。N先生とO君の砂場での関係。すべり台でのA

子と先生とのかかわりあい。こうした関係が彼らの経験を助け、遊びの創造的な発展をうながし、活動への意欲を育てる。こうした教師とのかかわりあいを経験して子どもたちは成長していく。

私は「指導」とはこのように、教師と子どものかかわりあいの中にあるのだと思う。

二、子どもひとりひとりの経験を尊重する

六月の保育室。たらいの中に蛙やえびがにが飼われている。

たらいのふちに集まつて、じつと蛙を見ている子どもたちがい

て、落ちないようにそろそろ歩いてみると。

教師「あっ、よう泳ぐね。あっ、石の上に飛んだわ」

恐る恐る蛙の背中をさわって、あわてて手を引込めるA君。

教師「あら、A君背中にさわったのね、ちょっとと気味悪いね」

手に乗せてじつと眺めているS君。今度は肩の上に止まらせ

て、落ちないようにそろそろ歩いてみると。

床の上をとぶ蛙と並んで、自分も同じようにいっしょにとんで

いるK子。

どの子もそれぞれ蛙やえびがに夢中になっている。

感極まつたような声でM子が「これが本当の蛙やなあ」とひとりごとをいう。

なかなかとばない蛙を持ったC子は、「どぶ蛙かして」と友だちに申し込む。

こわごわ見ていた子どもたちも、次第に蛙にさわってみるようになり、しまいには牛乳瓶の蓋に割箸をくっつけてスプーンを作り、金魚すくいならぬ蛙すくいの遊びを考え出したりして、子どもたち各自が夢中になつて蛙と遊んでいる。

この保育の中では、子どもたちひとりひとりの経験が尊重されている。そしてM先生はこうした子どものひとりひとりの経験に対して、その子の発見や、感動や行動をそのまま受け入れ、それと言葉でひとりひとりの子どもに伝えようとしている。いつそう子どもの経験をいきいきしたものにしているように思われる。

三、子どもの経験を教師も共に感じ理解する

最近私はこんな楽しい保育を見たことがあった。

部屋の真中にはセロファンやひご竹、松ぼっくり、木片等の材料が置いてあつた。子どもたちは製作の材料にする発泡スチロー

ルを部屋の外へ取りに行つたが、間もなく数人が一かたまりになって発泡スチロールのはいった大きな袋を運び込んできた。

最初の子どもたちは、部屋の真中まで来ると袋の中をのぞき込んで、中から一つずつ形のちがつた材料を取り出しはじめた。大きいまづまの発泡スチロールを取り出しているうちに、だんだん勢いがついてぽんぽんとほうり出す状態になつてきた。

すると第二、第三と続いてはいつてきた袋をもつた子どもたちも同じようにまねてスチロールをほうり出し始めたのだ。みると

るうちに部屋はスチロールで真白にうずまる。子どもたちは拡がった材料を、今度は上へ向けて投げはじめる。軽いスチロールが舞いあがって落ちてくるのがおもしろいのだ。自分の肩や頭に当たつてもおかましく、むしろその感触を楽しんでいるかのように夢中になつてほうりあげている。

なかには積み重なつた材料の上にうずくまつたり寝ころんだりして、スチロールの暖かさを肌で味わっている子もあつた。四十人近いこのクラスの子どもたちみんなが、もうこのことがおもしろくてたまらないといったようすでいきいきと遊んでいた。

Y先生にとってそれは予想もしなかつた光景であつた。製作材料にするために、この発泡スチロールを集め歩いた時のこと思い出すと悲しい気持がした。昨年も一昨年も放課後の半日をついやして商店街の電気屋を一軒一軒たずね歩いたり、店先に捨て

てあるのを拾つたりして袋に詰め、格好の悪さもがまんして自抜きどおりを自動車を避けながら大きな袋を三つもひきずつて歩いた時の自分の姿を思い出した。

まさかこんなことが起ころうとは夢にも思っていなかつた。先生

生の計画どおり子どもたちはこの発泡スチロールを使って何かを作ってくれるだろうと思っていたのに。しかしあおせい。子どもたちはスチロールをなげている。どうすることも出来ない。止めさせようと思つても簡単に止めそうもない。あきらめた先生は子どもたちの遊んでいるようすを見るより他に仕方がなかつた。

子どもたちは投げてみたり、手首にはめてまわしてみたり、頭に乗せて歩いたり、形を比べたりして遊んでいたが、そのうち、いつとはなしに、誰からともなく適當な材料を選んで、思い思いの製作に真剣に取り組みはじめた。

こんな中で、いつもみんなと同じように遊べないT君が、投げていた材料の中から長方形の枠を見つけ、その中に顔を突込んで「ガオー」と怪獣のまねをしながら歩いている。先生が「T君はテレビの怪獣になつていてるのね」と声をかけると、彼はますます得意になつて本物の怪獣になつたつもりで歩いていたが、やがてその枠を使ってテレビを作り始めた。セロファンを貼つたり、美しいまんがの車の絵を何枚も貼り付けたりして、見事なカラーテレビを完成した。しかも値札までぶらさげて、いかにも満足した

ようすでこれを抱きかかえていた。このテレビは彼が完成した最初の作品であつた。その後T君は製作に積極的に取り組むようになつていった。

私はこの保育を見て先ず感じたことは、自由で開放されたふんい氣に満ちあふれているということである。こうしたふんい気があればこそ子どもたちは、のびのびと好きなことをして遊び、遊びながら材料の持ち味をためし、そして自分たちのやりたい仕事を真剣に取り組んでいくことができたのであろう。

Y先生の保育は、先生のねらいどおり、ひとりひとりの子どもに力いっぱいの活動をさせ、その中でくふうと創造性を育てる楽しい製作の時間となつた。このクラスに流れているあたたかく自由なふんい氣が、環境に自から積極的に働きかける意欲的、創造的な子どもを育てているのではないかと思う。

更に私が感心したことは、Y先生がその場において、ひとりひとりの子どもが今、何を経験しようとしているのかを、子どもの立場に立つて感じとり、その子どもたちの経験を尊重すると共に、教師もその経験を共に味わおうと、子どもについていかれたからこそ、そこにはばらしい子どもの成長が見られたのだと思う。

「指導」とは日々の保育のあらゆる場において、教師の計画的ななどなみをとおして子どもの成長を意図的に助ける働きであると同時に、あえて意識的におこなっているとは感じない子どもとの関係の中にも、たいせつな指導がおこなわれていることを、しばしば見る思いがする。

特に幼稚園における指導は教師と子どものかかわりあり、人間関係の中に大きな意味があるのではないだろうか。そのかかわりあいの中で、特に幼児の成長を助けるための有効な指導と条件として、私は先に述べた三つの指導事例の中から、次の四点をひろつてまとめとした。

- ひとりひとりの子どもの主体的な経験が、尊重される自由であたたかいふんい気がつくられること。
- 子どもの経験を共に感じとり、理解しようとする教師であること。
- 子どもが言葉や行動で表現しようとしているものを敏感に感じとり、これを子どもに伝えてやること。
- 子どもを信頼し、子どもの主体的な活動を待ち、子どもについていくことのできる教師であること。

アジア太平洋地域

OMEPE会議今秋東京で開催

日本の保育界も、ようやく世界幼児教育機構(OMEPE)に正式加盟し、来年度の世界大会(三年に一回)に備え、昨秋は玉川大学において第一回国内会議が開催され、第二年目の本年には、次の要領でアジア太平洋地域(含オーストラリア)会議が開催されることになりました。

○期日　十一月十六日～十九日
○会場　東京文化会館小ホール
○日程　第一日　開会式・記念講演

第二日　各国内外会議報告・分科会(3)
第三日　映画・シンポジウム・閉会式
第四日　施設見学・観光(国外参加者)
国内参加者　二千円(予定)
国外約五十～七十名
国内約五百名(限定)

○申込　八月三十日まで

東京都千代田区九段北四の二の二五
学会館内(〒一〇一)日本幼稚園連合会
気付　OMEPE地域会議事務局
・案内書及び申込用紙等は、各保育団体事務局にお問い合わせ下さい。